

所属	言語文化研究科 日本語・日本語教育専攻 修士課程	修了年度	平成 23 年度
氏名	王 蕾	指導教員 (主査)	金沢 朱美

論文題目	<b>清末中国の日本語教育についての一考察 —金陵東文学堂卒業生編纂による『日語独習書』をめぐって—</b>
------	--

本文概要

日清戦争の敗戦で清朝政府は近代教育を導入する必要があると痛感して、中国では日本をモデルとする気運が高まるに従い、人材の育成は当時の急務となり、中国各地の日本語教育が発展してきた。東文学堂が次々現れた。

清国政府は数多くの留学生を日本に派遣するとともに、日本人教習を招聘することになった。日本人教習は各東文学堂に配置された。その中には一生、中国留学生教育に従事する松本亀次郎のような人物もいたが、経済的事情で中国に渡った教習もいた。

清末中国人の日本語学習の開始により、日本語の教科書が盛んに出版された。教科書の種類については入門書があり、総合的な文法書もあり、口語指導書も刊行された。

近年、日中日本語教育研究者は明治時代に出版された教科書に着目して、様々な教科書を掘り起こした。『日語独習書』(1903)も明治時代に編纂された貴重な教科書の一つである。

『日語独習書』の編纂者は日本語教育現場で名高い教師ではなく、東本願寺に設けられた金陵東文学堂の卒業生である。

『日語独習書』は、編纂者が日本語の授業で取った筆記録に基づいて編纂したものである。清末中国人の日本語学習の開始により、日本語教科書の編纂が盛んになったとはいえ、『日語独習書』が編纂された時期は、中国人向けの日本語教科書はまだほとんど存在しない状態であった。『日語独習書』の考察を通して、その時代、中国人が日本語を学習する様相を考察することが可能になり、当時の学習者の日本語のレベルまでも明らかにできるであろうと考えた。

方法として、筆者は先行研究の分析を踏まえて、『日語独習書』の音声表記の実態、長音表記、文法、語彙、扱われる話題場面などを抽出し、文法項目を現代学習項目と比較し、重複の度合い、語彙項目の各章における分布状況、会話文の主要な場面における話題などの面から分析考察した。その結果、金陵東文学堂において中国人が日本語を学習する様相や、語彙の分布状況、音声表記の特徴や総合的な『日語独習書』のレベル等を明らかにした。さらに吉岡(2000)の分類基準に基づき日本語教科書の分類における位置を明確にした。